

ニコライ・バルリンの手紙
「ロシアにおける社会生活と協同組合思想」
(1888年) をめぐって

今 井 義 夫

On N.P. Ballin's Letter 'The Social Life and Co-operative
Ideas in Russia' published in *The Co-operative News*, 7th
January, 1888.

Yoshio IMAI

〔内容〕

はじめに

I. 1887年のイギリス協同組合誌上の「ロシアにおける貧困」論

II. N・バルリンのロシア社会論

III. N・バルリンのロシア協同組合論

むすび

はじめに

1869年5月末から6月はじめにかけてロンドンで開催された第一回全英協同組合大会には、折から訪英中のハリコフの協同組合運動家ニコライ・ペトローヴィッチ・バルリン (Nicolai Petrovich Ballin, 1829-1904) が、ロシアの協同組合の代表として出席した。⁽¹⁾ 彼はがロシア・ウクライナの協同組合運動の先駆者の一人であり、他ならぬ本稿でとりあげた手紙の執筆者である。

ウクライナの商工業中心地ハリコフでは、ロシアで最初の消費協同組合のひとつが

1866年にバーリンをはじめとするインテリゲンツィヤによって結成されていた。バーリンは自らの運動の参考に資するため1869年にドイツ、フランスおよびイギリスの協同組合運動を視察していたのである。彼はこの訪英を機会に、イギリスの協同組合運動とロシアの協同組合運動との交流の端緒をひらいた。帰国後も彼はイギリス協同組合運動の指導者たちに、ロシア（ウクライナ）の協同組合の実情を報告したり、彼らの助言を求めてひきつゞき文通している。

バーリンは第一回の全英協同組合大会以後の大会には自ら出席することはできなかったが、第三回（1871年）および第四回（1872年）の大会には、ロシアから報告文を送っている。それらの通信は、当時イギリス協同組合機関誌や大会議事録の海外通信欄に掲載されて、他の国々の協同組合通信とともに、イギリスの協同組合員たちに海外の協同組合運動の実状を知らせるのに役立った。

バーリンは、その後久しく通信をしなかったようである。しかし、1887年の11月5日付のイギリス協同組合機関誌 *The Co-operative News* に匿名論文「ロシアにおける貧困（Poverty in Russia）」が掲載されると、これに呼応する形でロシアの社会生活と協同組合思想について自らの意見を伝える手紙を同誌に投稿した。彼の長文の手紙は翌年1月7日付の同誌上に抄訳されて掲載された。その内容はロシア（ウクライナ）の協同組合運動の先駆者バーリンが、20年を超える困難な運動のあげくに到達した独自のロシア社会観や協同組合思想を示しており極めて興味深い論文であった。同時に、彼の反論を誘発した匿名論文「ロシアにおける貧困」は、当時のイギリス協同組合員のなかにあらわれた新しいロシア認識を示す資料として貴重である。

本論では、これら二つの掲載記事によつて、1880年代末のイギリスとロシアの協同組合運動の交流の実情を示すとともに、形成期のロシア（ウクライナ）の協同組合思想についてその一端を明らかにすることを目ざしている。60～70年代の協同組合運動におけるバーリンの活動、およびこの1888年の手紙以前の彼のイギリス協同組合への手紙については、筆者はすでに別の機会に紹介を試みている。⁽²⁾従って、ここではそれらについての解説を繰り返すことを避けた。もし読者がそれらを参照する労をとられるならば、1888年の時点でのバーリンの見解には、それまでの彼の著作や通信のなかでは見られなかったロシア的協同組合運動についての独自の見解が顕著にあらわれていることに気づかれるはずである。それは、ロシアに先駆的な西欧の協同組合運動の思想や経験を移植しようと努力した先駆者の到達点であり、それ以後のロシア協同組合運動の思想的原点のひとつを示すものともいえる。今日、国際的に協同組合運動の再生とそのための組合思想の再検討の必要が認められているなかで、筆者のこの⁽³⁾

ささやかな資料紹介の試みが、従来英国やソ連の学界でも殆んど忘れられていた史実についての関心と呼び起すのに役立つならば幸いである。

パールリンの足跡を追って筆者は1981年8月にモスクワ、レニングラードを経てマンチェスターにあるイギリス協同組合連合本部付属図書室を訪れ、資料の調査を試みた。⁽⁴⁾ その際、図書室長 R.ギャラット氏と同司書の S.スレイド嬢の協力を得て、本稿所収の資料をはじめとする貴重な資料を見出すことができた。御両人の好意にたいして誌上を借りて感謝を表明したい。

〔注〕

- (1) G. Holyoake, *The History of Co-operation in England* 1875, Vol. 1, p. 425.
- (2) 拙稿「ニコライ・パールリンの英国協同組合員への報告書簡をめぐって」『ロバート・オウエン協会年報VII』1982年所収。本稿で紹介する1888年のパールリンの手紙は、上記の論文には紙数の制約のため含まれなかったものである。
拙稿「ハリコフの最初の消費組合（1868—71年）とニコライ・パールリン——南ロシア（ウクライナ）の初期協同組合運動史から——」『一橋論叢』第89巻第1号、1983年所収、参照。
- (3) A. F. レイドロウ著『西歴2000年における協同組合』日本生活協同組合連合会訳、1980年、参照。
- (4) 拙稿「英国とロシアの消費協同組合の源流をたずねて——資料探求の調査旅行報告——」、『ロバート・オウエン協会年報VI』1981年所収、参照。

1. 1887年のイギリス協同組合機関誌上の「ロシアにおける貧困」論

1887年11月5日付のイギリス協同組合機関誌『ザ・コーポラティブ・ニューズ (*The Co-operative News*)』誌上の匿名論文「ロシアにおける貧困 (Poverty in Russia)」⁽¹⁾ は、折からロシアにひろがる大衆の貧困と飢餓状態をめぐって、そのすざまじい状況を伝えるとともに、この飢餓問題の解決が単にロシアにとってのみでなく、ヨーロッパ全体の平和にかかわる問題であることを訴えている。同時にこの論者⁽²⁾ は、イギリス人の間に見られるロシアにたいする知識の乏しさと西欧的偏見を指摘し、従来のロシアへの関心や情報が専らその支配層についてに限られ、「苦役と乞食と受難のロシア」について無関心であった点を改めて、民衆の側に立ったロシア認識が必要であると主張している。論者によれば、ロシアにおける支配層と下層大衆の間には「巨大な断層が定着しており」、後者がなければ、前者はほとんど無意味なのである。しかも、ロシアでは「人民が彼らの強盜的スポークスマンを傍におしやる日はそう遠くあるまい」と予想されている。民衆への同情的立場から書かれたこのようなロシア論は、当時の

イギリスにおける定期刊行物の中では、ゲルツェンやステプニヤックなどの亡命革命家による出版物以外には稀有な現象に属したであろう。それがイギリスの協同組合機関誌上にあらわれたことは両国の交流史上注目すべき事件であったといえる。

匿名論者はつづいてロシアにおける飢餓をもたらした経済的破綻の原因にふれながら、当時のロシアの窮乏状態を次のように描いている。すなわち、1861年の農奴解放以降の政府による土地所有農民の育成策は、巨額の投資にもかかわらず農民が絶望的な債務者におちこむことを救うことはできなかった。そのため、各県で10万人以上の農民たちが分与地に背を向けて、大都会に生活の場を求めて出かけている。そして、彼らの間にひろがる飲酒や宗教的教理にもとづく施しの慣例、および強制した土地分割と分配の失敗の結果、乞食を専業とする人々の広汎な増加をみた。それは地味の貧しい場合にはとくに著しい。そのような事実を伝える現地情報として、論者はロシアのイギリス領事館員の報告からの次のような引用を掲げている。

「モスクワ県では52個村の村民全員が組織的な乞食生活を行っており、そのような専門的乞食はロシア全国土を通じて、少なく見積っても35万人は存在する。ペテルブルクでは人口の四分の一が乞食である。彼らのために支出される金額は年間640万ルーブリに達しているが、死亡率は高く、1835年の統計では人口の31~35%に及び、その原因の主なものはパンの不足である。貧困の原因のひとつは税金の高騰、汚職などであり、政府の医療への支出は少なく、治療を受けられるのは都市だけである。」

論者は以上のようなロシアにおける民衆の窮状を伝えたあげく、「貧困と不幸のこのおどろくべき規模を、もし根絶できないにしても、いかにして減少させるか」を問題とすべきだとし、先にも記したようにそれは「ロシアにとってのみでなく、ヨーロッパの平和にとってもおそらく重大な問題であろう」と記している。

論者はここでさらに、従来のロシアについての西欧的優越感を反省し、ロシア人の自治能力についての民族的偏見を正す必要を説く。「われわれはとかく、自らの誇り高い優越感や自治的な人間としての観点から彼らを見下し、専制君主制に立脚する人々の救い難さを哀れみ、彼らを自治機能にとって無資格だとみなしがちである。」論者によれば、このようなロシア人についての考は全く誤った思想であり、そのような偏見の持主は、専制から立憲制への平和的移行が可能であることや、ロシア人が伝統と実際の両面で民主的な方法を完全に実現できることを想像し得ないのである。

論者はさらに、バクーニンがロシアの農民はその本質からして社会主義的なので彼らの間では社会主義的な宣伝は必要ないと述べたことを引用したうえで、ロシアの民主制の伝統に言及している。すなわちロシアでは古い時代の統治は、公選された公侯^{クニャージ}

により行われ、その統治は憲法的な法律で拘束されていた。公侯は短い期間で解任され得たし、任命された役人も替えることができたし、また法令も無効にすることができた。全国会議（ゼムスキー・サボール）では、すべての決定が投票でなく完全な全会一致で決められた。そのような原始的で純粋な民主的統治は都市では消えてしまったが、ミールまたはゴマーダ（ホマーダ）という名で地方では今なお存在している。

論者はさらに、古いミールにたいして、最近のロシアの公的集会制度としてのゼムストヴォをあげ、その由来と現状にふれている。すなわち、1864年に皇帝の勅令で地域集会または地主、ブルジョアジー、および農民からなる代表者会議として設立されたゼムストヴォは、はじめの頃にはその民主的機能を大いに期待されていたが、その後実際政治への参加を妨げられたり、その活動をひどく警戒されたために実情は期待を裏切る結果となり、以前の評判は地に落ちたと。論者はロシアの亡命作家ステプニャックが、ゼムストヴォは今や汚れた廃棄物の状態にまでおちてしまっており、その制度は「いつか本物の材質で充たされ得る枠組」としてのみ存在価値があるのだと書いていることを紹介している。またロシアの職人たちの伝統的な協同組織としてのアルテリについては、それが主に生産に適用されたロシアの古い形の協同組合であるとみなし、「いずれの日にか、ロシアの人民に救済をもたらす制度のひとつである」と積極的な評価をしている。論者はつづいてロシアにおける乞食のための救貧院（work-house）や収容所（colonies）について簡単にふれた後で次のように結論している。

「ロシアの社会的病いはかくも重大だが、それは賢明に方向づけられた協同的な努力によれば解決できないものではない。そして、われわれがすでに見たように、協同的感情は地方では多様な伝統として生きつづけている。それゆえ、立憲的な行動が人民の側から必要とされる時には、いつでも彼らの民主的伝統が救いにやってくるであろう。そして、それまでは、それらは“神とツアーリの許しという名目で”国民的窮乏の呪いを和らげるために利用されるであろう。」

ロシアの惨状について伝えながら、冒頭でも記したようにこの論者は総じてロシアの人民の未来について肯定的であり、彼らの自治や協同組合的な能力について好意的である。おそらくこの論者の基本的知識の出所は、文中に引用されているバクーニンやクロポトキンやステプニャックらの著作に負う点が多いであろう。当時、彼らはいずれも政治的亡命者としてロンドンに立ち寄り、当地の識者たちにロシア人民のもつ伝統的な共産主義的性格や潜在的な変革能力を宣伝していたのである。彼らの農民共同体論やナロードニキ的な農民理解の影響がその論文の中にもうかがえる。

イギリスの協同組合機関誌にこのようなロシア論が登場したことは、早くからロシアの協同組合運動についてイギリス協同組合員たちの理解を求めて投稿したこともあるニコライ・バールリンからの次章のような反響を呼び起すことになる。

〔注〕

- (1) 'Poverty in Russia' in *The Co-operative News*, Nov. 5, 1887, pp. 1100-1101.

本章での引用箇所はすべて上の論説からである。

- (2) この匿名の筆者が誰であるかは、いまだに確認できない。しかし、その後1890年からロンドンで結成され、亡命ロシア人作家ステプニャック=クラフチンスキーらを助けて英文誌『自由ロシア』を発行した「ロシアの自由の友の会 (The Society of Friends of Russian Freedom)」の関係者かと思われる。

II. バールリンのロシア社会論

1888年1月7日付の『ザ・コーポラティブ・ニューズ』誌に載ったバールリンの論⁽¹⁾は二カ月前に掲載された上記の無署名論文に触発されて書かれたものである。そこにはロシア協同組合運動家としての彼の意見がロシア国内では示し得ない卒直な態度で述べられている。

冒頭で彼は、「論文『ロシアにおける貧困』はあまりに悲観的にすぎます。総体的には、そこで記されている諸事実は正確です。しかし、それらはより独立的な観点から見られるべきものであると考えます。」と記して以下自説を展開している。

バールリンは、バクーニンが「社会主義をロシアの農民にたいして説く必要がない」と言っているのにたいして、自分は「ロシアでは農民にたいしても、また都市の住民にたいしても協同 (Co-operation) を説く必要はともにないとつけ加えます」と主張している。彼によれば本来ロシアの農村住民は一般的にいて共産主義者であり、都市の住民は一般的にいて協同組合主義者である。そして彼らにとって必要なことは、盗賊や金持たちにたいする闘いのために協同組合的教育を行うことである。

バールリンによればロシアは土地共有制の伝統を保持しているが、北部地方と南部地方（ウクライナを含む）には違いがある。すなわち南部地方の社会は北のそれにくらべてより多く協同組合的であり、より少なく共産主義的である。この主張は彼の出身地が北部であり、協同組合運動の中心地が南部地方のハリコフであることからして、自らの体験的認識を示すものであろう。

バールリンはここで所有権についての諸法律について論及し、それらをより広義に適用する必要があると主張している。さらにここで「幸福とは所有者のことである (Beati possedentes)」という諺をあげているのは、彼が協同組合主義者として性急な

社会主義化または共産主義化を非現実的なものとみなしていることを示している。所有権の完全否定はバールリンの当面の目標ではない。その新たな認識と協同組合的活用こそが問題なのである。

バールリンは私的な所有権を主眼とする西欧のローマ法的所有観にたいして、所有の三つの形態として家族的所有、個人的所有、公共的所有をあげて、これらの三つの形態の調和的成長が可能であると主張している。そして、「すべての個人ができる限り協同的性質の財産を獲得しようと努めることは、その結果として得られたものが全世界の利益となるであろうから、個人の義務だと考えられる」として協同組合的な所有の積極的意義を説くのである。

バールリンのロシア社会批判は封建制批判、とくに全社会を覆う専制的傾向への批判である。この論文で彼はまず、ロシア社会の基本的欠陥として、あらゆる社会機構にゆきわたっている専制主義 (despotism) の支配をあげている。政府の専制主義のみでなく、北部地方のミールの指導者たち (Varnicks) の専制主義、南部地方のホマーダ (Gommada) の専制主義、僧侶たちの専制主義、資本家であろうとなかろうと男であれば誰でもがもっている専制主義、それに加えて、アルテリヤスタルシーナ (16~18 世紀のロシア、ウクライナのコサックの富裕な上層階級……訳注)、家族、関税、農民政官の専制主義などである。これに対抗する新しい自治的組織としてのゼムストヴォについては、彼はそれがロシアのコミュニティーやソサイエティーを統合できないとみているが、その理由としては、「それらが適切に構成されていないからというわけではなく、それらが協同組合的に構成され、自然的な社会主義化を求めない限りはゼムストヴォは組織され得ないからである」と説明している。ロシアの民衆の間にある共同体的原理に反する組織は結局成功しないという思想がそこには見られるのである。同様の理由で、彼はロシアの政府は封建制の結果としてのヨーロッパの政府の単なる猿真似となっていると指摘する。彼の主張によれば、ロシアの本来の行政形態はヨーロッパの行政形態とは大いに異なるものであって、協同組合的行政への移行の一形態であり、それなりの有利さをもっているとされる。この反封建的で協同組合的な主張はその基本点で、西欧とロシアの政治的原理の異質性を前提しており、ロシアにおける封建制の欠除を主張したスラヴ主義者の見解や、西欧資本主義の原理を非ロシア的とみなしたナロードニキの見解に通じるものがある。

バールリンはヨーロッパと異なるロシア的な行政形態の研究がイギリス人にたいしても協同組合についての偉大な教訓を与えるであろうと述べている。バールリンによるロシアの国家と社会主義の独自の関係を示す言葉がこれにつづく。「あなた方は、わ

れわれがわが国における国家社会主義 (State Socialism) から期待するところのものと、それをどのようにわれわれが利用できるかということを学ぶことができるでしょう。」この言葉からすれば、彼の社会主義とは国家権力による上からの社会主義化を意味するものと考えられる。彼はつづいて、「あなた方はまた、われわれ協同組合主義者が立憲主義 (constitutionalism) からなにも期待しない理由をも理解するでしょう」と記し、それに代わるものとしてステプニャック的な自治 (self-government) の理念への支持を表明する。彼は、ロシアにとって英国的もしくはローマ的な自治を不適当なものと公言しているのである。先にもふれたように、その言わんとするところは、ロシアには西欧と異なる共同体的社会的原理が必要であり、それは協同組合のあり方についても適用されるという思想である。ついでながら、彼のいうロシアの国家社会主義とか全会一致制とかの思想は、革命以前の政治思想に見られるだけでなく、今日のソ連社会主義の体制思想にもひきつづき見られるロシアの伝統的発想といえるのではなからうか。

「ロシアにおける貧困」の筆者が高く評価しているロシアの伝統的協同組合形態としてのアルテリについては、バールリンは必ずしも肯定的な見方をしていない。むしろそのなかに多くのマイナス要因を指摘しているのである。彼は「アルテリはロシアの人民の救済にはならないでしょう」と断じ、その理由をそれらがあまりに個人的な性格をもっており、協同的な経営に反対して個人取引を發展させている現実を指摘している。彼によれば、ロシア人民の救済は、アルテリよりも農村的工業と家内工業の中にこそ存在するのである。彼もアルテリがロシアに広く分布していることや、その種類が多様であることを認めている。そして、アルテリは請負人たちが仲介者 (middle man) を置く場合には多かれ少なかれ協同組合的性格をもつが、もし、それがなければ、アルテリは非常に悪質な搾取をする制度となると指摘している。具体的には、アルテリのメンバーは適当な仲介者がいない場合には、仕事を持続させるためにわざと仕事をサボタージュして低い賃金にふさわしい低能率な仕事をするのだという。

ロシアの財政不況についてのバールリンの見解は、体制批判に結びつく厳しいものである。彼によれば、ロシアの当面する不況はその不合理な官僚主義のごく自然な結果である。官僚は社会経済について理解していないし、彼らの基準は念入りに作られているが、なにか古い重商主義的なシステムに似ており、理解し難い符号類や、ただ欺くだけの文句が横行し、詐欺の結果が彼らの富をもたらしているのだという。

バールリンの経済観は概して不明確である。文中「しかし、われわれは富とは何かを理解していません」と言明しながらも「われわれは労働とは熟練 (skill) ではなく、

直感的な訓練 (intuitive discipline) であることなどを考えています」とも記している。ここで彼が熟練に対比している直感的な訓練とは何であろうか。鈍重な農民的なロシア民衆にとって敏捷な直感能力の養成の必要を主張しているのであろうか、あるいは、より内面的な訓練のことであろうか。

彼はつづいて「われわれの貧困は無知の結果です」と云う。無知 (ignorance) という言葉を再三にわたって強調しているのが特徴的である。ロシアの貧困を自国民の無学の結果とみなすパールリンにとって、民衆教育が協同組合活動の重要な一環であった。彼がハリコフで努力したのも民衆教育の事業であったし、ロッチデールの協同組合見学の際にもその点を特に注目したことは、彼の伝記者も指摘しているところである。パールリンにとって当時のロシアの学校教育制度の後進性は、特に我慢ならないものであったようである。この論文のなかでも、その点について次のような記述がある。やや長いが引用してみよう。

「われわれのゼムストヴォ (民衆の学校——原注) は悪だと考えられています。しかし、それらを改革する代わりに、牧師による古い教育システムに戻るということで片付けられています。ところが牧師は彼ら自身がひどく無学です。主に彼らが生活の手段としている宗教行事にたずさわっているために学ぶ時間がないのです。それらの学校の目的は公けに宣言されているように人々に宗教教育を与えることです。しかし、実際には学校は人々にただ教会からの若干の無益なスクラップを与えるだけで、知識はその重要度が二次的なものとみなされ、与えられていないのです。政府は古典ギムナジアを創設しましたが、それが保守的な学校となるだろうと考えてのことです。今やそれらが無価値なものであることが証明されました。そこで学ぶのは、ロシアにおいて極めて少数派の富裕階級に限られています。他の階級は現在、全く学校をもっていません。人口は増加していますが、学校の数が増えていないのです。わが国で学校が充分あるとは全く言い難い状態なのにもかかわらずです。」

次にロシアの産業界の状況についても、パールリンはその後進性と頑迷さを痛烈に批判している。ロシアの株式売買人は互いに食いものにされない限り同業組合すらつくれない心情の持主であると指摘し、さらにその排他性について次のように記している。「彼らは外国思想や外国資本に反対して戦っています。なぜならそれらの思想や資本は国際的であり、もしそれらが自国にやってくれば、彼らの利益に終りをもたらすであろうと感じているからです。」その実例として、ロシアの産業界で必要な昇降機の製造会社の設立のために2500万ドル (495万8千ポンド) の資本をまず提供しようと申

し出たアメリカの資本家の申し出を断って、ロシアの資本で会社の設立を行うべきだと主張したいいわゆる「ロシア党の代表者」故カトコフとその偏狭なナショナリズムをあげて批判している。

〔注〕

(1) 'Social Life and Co-operative Ideas in Russia' (Extract from a letter by Nicolas Balline of Kharkoff) Interpreted by E. V. N. in *The Co-operative News*, January 7th, 1888.

本章での引用文はすべて上掲の手紙からである。

Ⅲ. パールリンのロシア協同組合論

この手紙の中で、パールリンは自らの社会主義観や協同組合観についても語っている。彼は総じて当時のナロードニキたちの運動方針については、きわめて批判的である。彼の表現によれば、「ロシアの人民と彼らのために語ることを引き受けている人達の側との差は大きくなく」⁽¹⁾、両者ともに無知が優越しているという。彼が、人民のために語ることを引き受けている人たちというのは、多分ナロードニキたちのことである。文中「わが国の陰謀家たち」と彼が呼んでいるのは、そのうちでも革命的な活動家たちであろう。この手紙の書かれる七年前に、アレクサンドル二世は「人民の意志」派の投弾によって暗殺されており、その後の政府の弾圧で革命家たちの活動は閉塞していた。パールリンがここで「陰謀家たちがもし政府の体制改革を夢見ているのならば、それは不可能を夢見ていることである」と記しているのはそのような状況を踏まえていたからである。彼は社会主義そのものには反対ではないが、このような状況の下での提言として「社会主義はわれわれの魂の中に育てねばならない」という新しい提言をしている。しかも、社会主義がいかなる規模においても自己を表現できるためには、長い時間を要するであろうと予想する。彼によれば、心の社会主義化過程が深く進行している肉体においてのみ現実の社会主義が成長できるのである。

性急な社会主義志向を排するだけでなく、パールリンはさらに政治活動そのものを協同組合から排除しようと主張する。この点では彼の協同組合思想は穏健派のナロードニキたちやロッチデールの先駆者たちの傾向を継承しているといえよう。まず彼は偉大な社会的諸制度を性急に組織しようとするならば、はかない現象を生み出すだけになるであろうと警告したうえでさらに、偉大な社会制度といってもせいぜいヨーロッパ諸国の立憲体制に似たものであろうし、それらが人口の多数を代表することができても、すべての人口を代表できないとすれば、ロシアの協同組合員は敢えて政治を

無視することをよしとみなすと宣言する。これらの発言は現実の政治的変革運動のゆきづまりから、当時多くのロシアのインテリゲンツィヤが政治に失望して内省的にならざるを得なかった一般的状況をも反映しているともいえよう。バールリンはここで、「われわれは知恵 (wisdom) の観念、すなわち自己認識 (self-knowledge) からはじめなければならない」と提言する。バールリンの論調には、彼の晩年に深まった宗教的、道徳的傾向が目立つ。とりわけ、当時彼が私淑していた文豪トルストイの思想的影響が見られる。たとえばこの論文の中で彼は、自分たちはすでに進歩にとって必要とする以上の自由を得ていると記し、もし土地や資本の不足を訴える人々があれば、それは自らの前進を妨げられたからといって悪魔を責める人に似ていると非難するのである。

かって16年前の第四回全英協同組合大会に向けての自らの報告の中で、バールリンは普仏戦争に反対して反戦平和のための協同組合員の連帯を訴えたが⁽²⁾、ここでは「われわれは、戦争その他の災難をわれわれにとって有用であり得ると考えるまでになっております」と告白している。今や彼にとってなによりも重要なのは人類の道徳的または宗教的な完成を通じての社会の発達の問題である。戦争も生死の問題もそれにかかわる限りで意味があるにすぎない。

「わたくしは、われわれの子供たちの死や、われわれが避け得ぬ死一般を社会的感情の教育のために罪ほろぼし的に必要なものだと考えます。もしわれわれの道徳性があまりにも偉大となり、われわれが死滅することになれば、それはそれで、われわれの運命です。わたしがいま信じているところでは、それは社会性の新たな発達であり、われわれの現在の文明をよりよい社会状態へと導き得るためのより高次の段階を発展させるものです。そして、それにむかって現在よりもより宗教的な新しい運動を示唆するだけのことです。」

バールリンは、以上のことに関連して人々が自分自身の重要性を明確に理解するために学習の場としての協同組合大学を設立することを期待する。彼の表現によれば、そこでは個人の生と死の世界と社会的世界（それはまた道徳的および宗教的である）との間の諸関係が論理的構成のなかで表現され得ることが期待されるのである。そのことはまた、彼がわれわれが何をなし得るかを自問し、その活動の目標を 1. 外面的な機械的進歩、2. 内面的進歩、すなわち自己改善、3. 心の社会主義化、すなわち教育と社会的組織の三つに置いていることと無関係ではない。この論文の終りに近い部分で、彼は協同組合運動の目的をあらためて問い直す。たとえば、多くの協同組合員がその目的としている物質的欲求の充足にしても、その計量尺度をどこに見出すか

について従来不問に付されてきたことが指摘される。また、外面的進歩と内面的進歩および教育との諸関係が何であるかを知る必要が指摘されている。

これら活動の再検討に際してもバールリンが全会一致の原則を発展させたいと望んでいるのが注目される。それは、同志的な結びつきを強めるためであり、反対論議や投票採決などによる解決でない。そのために、「イエス」か「ノー」かの問いかけを「なぜか」そして「いかに」の形に変化させる教育的な配慮が期待されているのである。彼は国際協同組合連合(ICA)にその参考資料として幾つかの組合の規約類を入手するのを助力してくれるよう希望している。

バールリンの手紙の次のような結びの言葉は、今日その原理的な再検討をもとめられている既存の協同組合運動にとっても示唆に富んだものといえよう。

「あなたは多分、以上の提言すべてが実際の仕事のためには深刻すぎたということに気づくでしょう。しかし、協同組合は実際的な仕事だけではないのです。それは新しい世界をつくり、そして、それによって多数者のためでなく、すべての人たちと全世界のためにつくられるであろう一般の原理を見出さなければならないのです。」

〔注〕(1) 本章での引用はすべて前章注(1)と同じバールリンの手紙からである。

(2) 前出、拙稿「ニコライ・バールリンの英国協同組合員への報告書簡をめぐって」1982年、36ページ。

むすび

1880年代のロシアは、革命的なナロードニキ運動がすでに行きづまり、新しい社会運動の方法が模索されている時期であった。ナロードニキの一員であったプレハーノフは1880年に西欧に亡命し、ジュネーヴでロシアで最初のマルクス主義的運動組織「労働解放」団を結成したが、それはまだ国外での少人数の運動にすぎなかった。新しい改革運動が求められているロシアの国内状況は厳しく、かつ貧しかった。

ロシアでは、1860年代後半によりやく西欧的な協同組合の結成が認められたが、多くの政治的・社会的障害(政府の弾圧や民衆の無理解、資本の不足、組合員の未熟等々)によって80年代にはむしろ低迷を続けていた。しかし、この協同組合運動を従来のナロードニキ的農民工作と異なる新たな都市型の市民運動として評価し、その育成にとり組んでいた先駆的な知識人たちがいた。その一人がバールリンであった。彼の初期の理想はハリコフを拠点としてロシア全土にイギリス式(ロッチデール式)生活協同

組合をひろげてゆくことにより、ロシアの経済的・文化的後進性を克服することになった。従って彼の運動は「下からの」市民的な啓蒙運動であり、同時に経済的な改革運動であった。二十余年の困難な運動経験を通じて、パウルリンの協同組合思想には同時代のロシアの社会的土壌に根ざした各種の思想傾向が反映せざるを得なかった。

本論で紹介したパウルリンの晩年の手紙のなかで語られている一種の道德運動ともいべき協同組合観は、トルストイの思想に通ずるロシア的なものといえよう。また西欧的な多数原理にもとずく運営よりも全員の合意に基く運動とすべきだとする彼の主張には、ロシアの伝統的民会^{ブエーチエ}の統治原理を説いたスラヴ主義を思わせるものがある。また国家社会主義の必要とその利用の可能性についての彼の主張には、当時の合法的ナロードニキの主張（ヴォロンツォーフやダニエリソン）に近い発想がみられる。パウルリンはマルクスの学説を知っていたが、その理論も彼にとっては協同組合理論の一先駆にすぎなかったようである。また彼自身が認めるように、彼のロシア協同組合思想には、西欧とは異なるロシア（ウクライナ）の民族的伝統や地方的な特色が反映していたのである。

今日われわれはソ連の政治・文化を理解しようとする時、国際的視角と称してとかく西欧的な視角（マルクス主義を含めた）にとらわれ、ロシアの歴史的特殊性についての研究視点を忘れがちではなかろうか。その意味では、本稿で紹介した1887年のイギリスの協同組合機関誌上の匿名論文の警告は、今日でも耳を傾けなければならないものがある。欧米人のロシアにたいする先入観や尊大さは、ある点で今日のわれわれの場合にも共通しているからである。

パウルリンのようなロシアの先駆的活動の思想と業績をたどることは、今日のソ連の協同組合運動が経てきた行程を歴史的に理解し、その普遍性と特性を認識するのに役立つであろう。同時にそれは、他国における協同組合運動の特性の理解のために有益な比較の材料を提供する。筆者が目下進めている協同組合思想の国際的比較研究にとって⁽¹⁾、それは必要な研究素材でもある。以上のような見地からすれば、パウルリンの思想と活動についての再検討には、すぐれて現代的な意義があると私には思われるのである。

〔注〕

- (1) 拙稿「ソ連、東欧における協同組合の現状と課題——ソ連、ポーランド、チェコスロヴァキアの協同組合運動の現地報告——」『工学院大学研究論叢』第19号、1981年、参照。
同『東西ヨーロッパの協同組合を訪れて』、協同組合懇話会資料、第五集、1982年、参照。